

算法少女

季女平氏輯  
上中下卷  
全





九州帝國大學理學部

7919

物理學教室

九州帝國大學工學部

812198

昭和10年10月22日

數學力學物理學教室

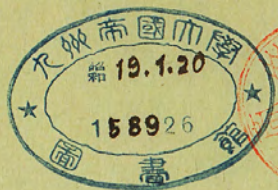
理學部 和 遼及

022132002023833



九州大學藏書





# 題算法少女

夫數之於六藝也猶橋之於六君典何則  
 禮樂射御書由是而達蕩苓木甘夏匪彼  
 不行故小技而列于藝林賤者而廁乎君  
 子嗟術之妙貴走之名不亦宜乎余家本  
 攝州世隱乎藪澤刀圭之服旁及斯技躬  
 玄探幽忘食忘憂假以歲月頗臻其妙嘗  
 有故而東又有故而西鱸蓴之思雞黍之  
 期不遠千里而來而往不遑寧處栖栖遲







算清少納言  
こ。むつろの同と設けし。屋ん  
とふらと頼まふらめ。或は梅の香  
のて満を神垣よ。或は枯木も花  
咲法の増ふ。一やせく名を並へて管  
とまららるると南志久あはれと。  
根や一子の岸をふれかひな

と舟の流はは海う務。後かし  
とこの程いし。おさゆめく。享  
保の末。左文の初つと。つと  
あさうり成りしとなす。さねと  
その音術を仕出し。あふハ。三と  
りといなりり。保とらや。とらち雄



も若くしてよきことなりし。春の  
日猶雪やまじ。秋の萩を争く文なり。  
時雪の初音も吹や〜。窓よ。  
後水も雪と小も。志〜ぬ魚よ。相  
宜しくあ〜年月を〜送る。終〜そ  
の音術を指し。指折を〜人ハ十

は〜あ〜何より〜。それゆ〜  
お〜〜後ね〜ハ十あよりあ〜  
〜終削へ終る。このこと〜  
〜あや怖〜〜お抽〜〜い〜  
〜さ〜あ〜〜。又目〜あ〜  
〜の〜あ〜い〜や〜。小〜見〜あ〜



ハ。おつゝの春の習ひ。せらゝとて。  
或る日さうく。揺けしよひ。又も  
記しおれをうめとかしよひ  
解ひるるゆへ。あまこのかたも  
あつ習ひ。意察のいさをも。あふ  
水傳へ。去ふよつゝ。あつゝの

こつゝの川むつゝ。あつぬ御よ。及  
ひよゝ。水の月と。あつ接の池  
よ。あつゝ。あつゝ。あつゝ。あつゝ  
の機や。あつゝ。あつゝ。あつゝ。あつゝ  
流の藤々。あつゝ。あつゝ。あつゝ。あつゝ  
な。あつゝ。あつゝ。あつゝ。あつゝ



目の下、乃算書の夏委しく語  
り多ふ。むう、昔算祖を初見。  
古今算法、三六の新月、た  
ゞふ、問とる皆と。以算術ハ見ぬ  
唐の算の國、よさるゝ知れ、人  
と。演説の妙、なると。関の東小

く、関氏の秘微。文古妙く、ハ文珠  
の和漢。世小行也。此後算法、推談  
のあまの、問成。秘微の算書、ハハ学  
有とれと。吾妻の青山氏、中学にて。吾  
史とる。流傳の算法。梅津の探玄。教  
傳の便法。環浦の算微。とる。並しり



世集 卷上  
毛お成く。水ありもきまきよ。其外  
牛小汗一捺。老糸等。又を  
浪江入楚の。未志。浪のち。姑よ。新  
いより。自。回。日。暮。し。く。お。し。り。  
心。を。垂。下。る。成。い。よ。三。州。を。お。若  
し。り。も。書。保。く。昔。を。見。返。り

く。そ。お。も。い。ゆる。誠。や。老。し。ら。雄  
の。年。月。この。蘇。り。心。を。築。波。山  
の。お。お。も。か。の。もの。を。る。さ。り。お。も。  
その。鼻。よ。涙。く。つ。け。入。る。い。心。つ  
ひ。の。程。を。回。し。志。の。人。を。以。事。よ。  
つ。く。お。の。く。し。と。建。た。た。ね。等。とり



と。板のまをうつら。巻の初小巻  
侍の

安永 〆のり

五月十日

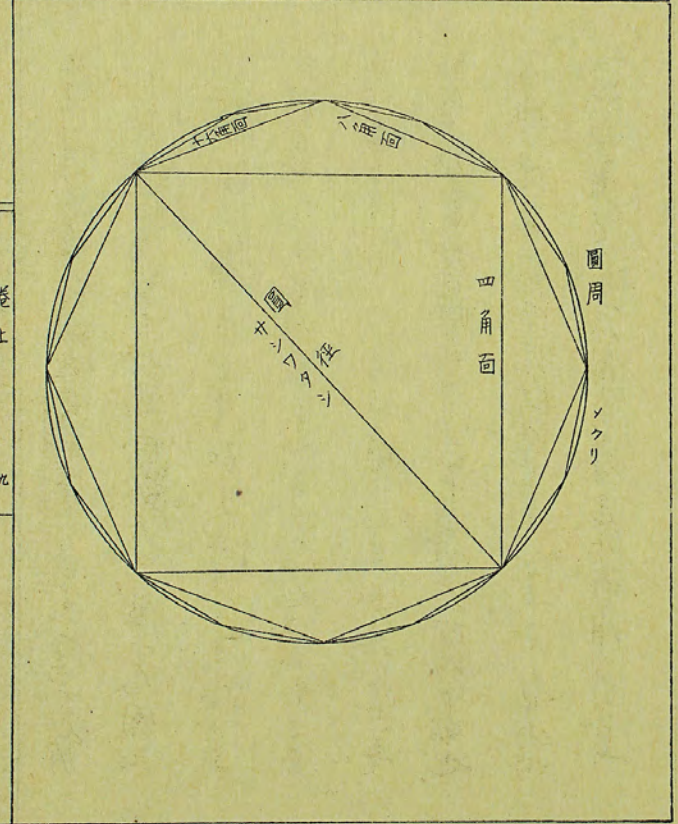
子の氏序

求圓周正數古今未發秘術秘術

夫圓法の珠蜜界——之則徑一  
圓之假令ハ徑一尺ナルハ圓三尺ナルと  
是右法のまゝ粗きをあり 則ち法  
七ありと是をまゝと云ふハ一尺と圓一  
之百寸歩とハ圓一——七十寸歩と云  
ふ是誠高積としまゝと徑一尺圓三尺寸  
六分と云あり 右法は此れハ稍密なる也



のふりて圓法七九と云はなりと徑一尺の  
 平角其積七千九寸歩あり又徑一尺圓三  
 尺寸二分二厘と云は前の三尺寸二分よ  
 りハ又密なるものなり則ち法七八と云  
 はなりと徑一尺の積七千六百寸歩あり  
 ありて密なるもの徑百十三圓三百六寸也  
 内外親味大率めは皆是のこしく圓の内  
 へ初回角を八又八角と容は十六角を容六





十四角百廿八角二百六十六角五十二角  
 子〇廿四角と次子五角倍と倍く  
 十餘万角を以て測あり  
括弧算法  
 五五たり  
 右の徑百十二周を以て得るより  
 然れども亦以て子百億は五とつとを  
 角の右を消くも各周の二倍を  
 して其の數を初漢古今も小知人  
 といつて 稀なりと 三角面の術と

不用也といふ數を求む妙くの術  
 あり玉極の秘術といひしにへども  
 今世人の無知小者を以て書か  
 ず未だ委しき記して以  
 方より其の大極玄妙の秘術あり  
 世の人、世々業のいや——と  
 してみたり——是れ其の事な  
 り



余嘗讀吳志。至頭乘尾除一算之法。父母不相語。及死。孫權聞趙達有書。求之不得。乃發其棺。一無所得。法遂絕焉。未嘗不發書而歎也。夫人死技絕。古今甚多。叔夜死。大平引絕。可類推已。孰與示諸四方。以垂于不朽。與天下後世共之也。

安永乙未之冬

壺中隱者誌

算法少女

卷之上

橘州 壺中隱者撰術

季女平氏朝

自問自答十條

第一

今をむし。あは長者の。錢の。胃小。や。や。



中坊との多まふ。なよると甲小にさるる  
事とく。米一粒を相日とる。晦日ま  
日一倍のり。ゆるりゆし。大打きも  
知りぬ。いとも成甲ゆるれ。長老打  
免ひと。いと心易事なり。何時もめ  
とえ得せん。と中とせん。彼かの  
こ。行く。一月の想高を。俵あく。只  
今をいともと中なる。長老もあ

は多糸粉。一吹のゆるめ。高を  
中ととる。ゆるれ。賤の買やう。算  
一。俵の数をま。即生。場を  
ゆるり。今温故而知新の意を  
もて。一算。知術。同事。

第二

今いむ。商人。三。有り。一人







第四

三尺二寸



舟のこし。水中に建てる舟なり。水面より水の深さを三尺二寸す。舟のこしより水の深さを知れぬなり

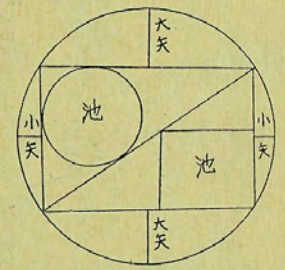
第五

八等成りたる舟のこし。十式万三千二百二十六石七斗八升九合を置。舟のこしより水の深さを一三二五八と。舟のこしより水の深さを知れぬなり。舟のこしより水の深さを知れぬなり

第六



算  
海  
方  
七



別のところ。大池の内小直田を。又内  
 一方の池あり。大矢式す。小矢一寸内の  
 各径方面と知る術。委しく初心の

見易く術の事

第七

今何事との小石あり。是と一より加そ  
 へく。三ふ七九と。奇数を取去れ。そ  
 余り八十。又二四六八十と偶数を取  
 去れ。八。余り。是を奇数を知る術の事

算  
海  
方  
七

卷上

五



其八

今ニ三人まゝみ七人お算一々。何百  
何十何百何分何毛を重なる。側せし十露  
盤いし。指みくか扱へ置誰く。遠  
い。誰くも合々まると。知る術の事

堂中隠若曰。何の比か。しよ。阿那の人  
浪花より。くは湖を十合もひとく。  
好事のもの。毎ひ求むと云。不獲

その類の。今生術と下巻に委  
し。記す

其九

小石成三千よりく並へ。かくは初の名  
と定め。か。目。あ。ら。ま。ら。る。石とと  
る。又。は。次。より。か。の。よ。あ。ら。成。解。り。  
何番目の石と何は。乃と。と。と。と。と。



十、ある秘傳なることを秘傳の事

第十

孕婦の年の数と。孕む月とを  
て。生む子の男女を知る妙傳の事  
は、古今類多し。下巻に記す  
る。右の新傳なり

○右十回を幼稚の法よると云ふ

右は、巻の初めに記す所を  
佐北の友。初心の多引等と  
傳は、夢は志あるんを能く  
言ふ。そのうち下の巻を見  
ると、  
いふ教の事、記すそのあり

○愚問十條



第一

小冊の謠。一夜二よ三夜四よ。七夜  
八夜九よ。よのよのよ。ハ粉ふよ。九  
十九夜よ。我駭いあり。かうくお。ま  
事也。まぬを同

第二

いろはに ちりぬる そつねな けめ

みー

右十六の如形を。入替くみ文字の句  
よむ。よふ。その般何程か。まきし。ま事  
と。知。術。の。事。

第三

今更九樹。法七樹の般あり。除之一  
箇○○○○○七 弱と得。う。法。とも。玉





算法少女

く少粒を用ひてその粒を知らぬ  
の事

第四

今童あつまりて桃を食ふ人粒  
を食ふは只云初の取有也。口中の取  
わく。末の取有と係りて其方〇比百四十八  
又ら初より二弟三と。末は弟少

まの内に刻あり人粒を奇とて  
桃の粒数を知る術の事

第五

圖の如く。五角半回の角は小他あり  
矢若若干。外餘積若干。天元を不用  
算解とて初心の見事とて。又算本を  
不用。十餘積ありてお麻粒少とて。

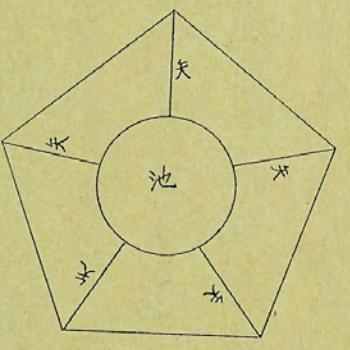
算法少女

卷上

十九



角面并池徑とては樹の



右の問ちるさきしむりさき  
は河も。初学初の十問の術意を能

く見物ひく。後考へてまいる。月  
 は樹を得物ひく。まゝ徳然の友。  
 初心の事引算不出。何。月を以  
 下の問。ききし。ち確を此の人の  
 もと志しつるを。そ。草橋  
 篇中より。は。書の内容より。お  
 ち。ふり。初心の可企及。あ  
 じ。あ。あ。あ。能。ん。ひ。を。ん。



考務也。程日月の力。師友の助やく。  
自然と其境に入り居るべし。同  
志の人々。勤学の志成をもて志め  
し傳ふ

第六

今五匁銀百斤。此朱銀八十斤を借。只  
云ふ及銀の元利合金控き及銀分。此

朱銀元利合金控き及銀分九分五厘  
六毛八絲。又云ふ及銀の利息を年々  
割此朱銀の利息を年々割此分  
なり。借くは年数を以て湖の事

第七

今下品の銀。其數を少知。一端の價  
銀十匁及七分六厘。此銀。以銀を上



不き湯價銀三千又の物も易れん。  
銀計千九又六分貳厘三毛八絲余る。  
上下二品の絹敷と得る漸の事

第九

今物何れも。糸粒を知らん。その糸粒  
自と云——と。十口分の十一と取。  
八箇も加へ——又十三分の三と

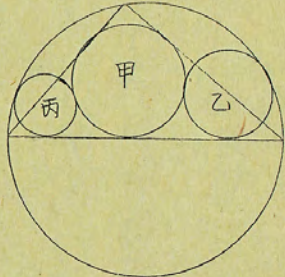
とら。半法と云——糸粒と  
糸粒を知らぬ漸の事

第十

糸のこも。大圓の内糸之料と甲乙  
丙の三糸を容る。只云甲乙丙糸若干  
又云甲丙糸若干。又云乙丙糸若干  
若干。大圓徑と知る漸の事



算術少女



以上の二問。同志の人々の考  
 動小儀の。算をまわすのよ  
 りも。自序より。中巻  
 及び末の巻。亦二問をかせり。

是其の算術と海なり故耳い云  
 と記して。蛇足と係るの。

算 法 少 女 上 之 巻 畢

算 法 少 女 上 之 巻 畢







算滋妙好

式 丁是商幾分也 問者若干

答

甲商十箇

乙商十三箇  $\frac{三}{一}$ 分

曰

丙商十箇  $\frac{分}{一}$ 之五

丁商十箇  $\frac{分}{一}$ 之十

壹中隱者曰是中井某之所設也。其人未嘗知受業于何門若其問也可謂高妙矣。余嘗在浪華獲之于管廟因思諸思諸又重思諸既而獲諸若有神而通其術所謂盡式而新奇者也。終答對焉其術頗秘不示人有年矣。故今於此書亦不載獨載商數且夫題辭書以國字今遵而不改

焉覽者其察諸

第二問

甲六十段頁

三百二十五正

十七

正

十三

頁一算

正

右式

甲五十二段正

七百八十三頁

二百十九

正

三十五

頁一算

正

左式

今有如右兩式右三商和十左三商和十問甲乙

答曰 甲十一 乙十

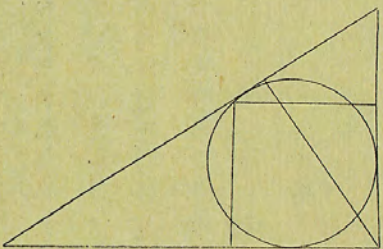
第三問

今有鉤股內容方圖及中鉤只云四徑中鉤差寸四又云四徑



方面差<sup>十二</sup>依此數欲設得鈞股  
弦及長弦短弦五商之式其術  
如何

答曰 依左術得得五商四  
乘式<sup>上</sup>



壹中隱者曰余既答于中井某以盡式新術居以幾何又  
得二問則藤澤武義之所設也此諸第一愈妙愈奇其附  
言曰斯問也何足為難發春自答期人窮年見答時元文

某年冬十二月念五日也於是發憤忘食不堪望蜀之意  
竟應其需人皆稱神速其術如左

答於藤二術曰右三商和內減右隅餘名為丙 ○ 左隅內  
減左三商和餘名為丁 ○ 以丙減右隅餘乘丙得內減右  
廉餘乘丙得數以減右方餘乘丙為右實數 ○ 左三商和  
乘丁以減左廉餘乘丁以減左方餘乘丁為左實數 三十九  
之以減右實四<sup>十</sup>之餘三百七十二除得甲數六<sup>十</sup>之以減  
右實餘三十九除得乙數合問  
答於藤三術曰術內只云數為只又去數為又累 只又和名  
為甲 ○ 只又差名為乙 ○ 列甲再自乘以只四巾共又  
三中乘之得數以乙六巾除之<sup>四</sup>為正實數 ○ 甲再巾<sup>三</sup>  
回只因又甲巾以乙除之<sup>四</sup>因又三中甲以乙巾除之<sup>八</sup>三



位相併以<sub>二</sub>只<sub>一</sub>三中與<sub>二</sub>又<sub>一</sub>巾乘之得數以<sub>二</sub>乙<sub>一</sub>四巾除之為<sub>二</sub>負<sub>一</sub>方數  
 ○因<sub>二</sub>只<sub>一</sub>再巾因<sub>二</sub>又<sub>一</sub>三中甲以<sub>二</sub>乙<sub>一</sub>除之<sub>限</sub>只<sub>二</sub>三中<sub>一</sub>又<sub>二</sub>四巾<sub>一</sub>  
 相乘得數以<sub>二</sub>乙<sub>一</sub>巾除之<sub>限</sub>因<sub>二</sub>只<sub>一</sub>再巾因<sub>二</sub>又<sub>一</sub>甲再巾<sub>限</sub>三<sub>二</sub>位相<sub>一</sub>  
 併得數以<sub>二</sub>乙<sub>一</sub>三中除之為<sub>二</sub>正<sub>一</sub>廉數 ○因<sub>二</sub>又<sub>一</sub>巾甲以<sub>二</sub>乙<sub>一</sub>除之  
<sub>限</sub>只<sub>二</sub>甲相併<sub>一</sub>以<sub>二</sub>又<sub>一</sub>再巾乘之<sub>限</sub>以<sub>二</sub>乙<sub>一</sub>巾除之<sub>限</sub>甲<sub>二</sub>巾<sub>一</sub>三<sub>二</sub>位相<sub>一</sub>  
 併以<sub>二</sub>只<sub>一</sub>巾乘之得數以<sub>二</sub>乙<sub>一</sub>巾除之為<sub>二</sub>負<sub>一</sub>隅數 ○只<sub>二</sub>相併<sub>一</sub>  
 以<sub>二</sub>只<sub>一</sub>共<sub>二</sub>又<sub>一</sub>乘之<sub>限</sub>以<sub>二</sub>乙<sub>一</sub>巾除之為<sub>二</sub>正<sub>一</sub>三乘數 ○以<sub>二</sub>一<sub>一</sub>算為<sub>二</sub>負<sub>一</sub>  
 四乘數合問

第 四 問

今有人買粟黍稗三品不知其斛數只云得該銀關四乘法  
 為粟該銀再自乘之為黍該銀又云各每斛價粟十三文黍

八文稗五文別云各斛下有奇粟四斛<sub>十三</sub>分黍三斛七<sub>分</sub>稗  
 五合稗八斛問得各該銀術<sub>三</sub>該銀不滿一千萬

粟該銀十九文

答曰黍該銀六千八百五十九文

稗該銀二百四十七萬六千〇九十九文

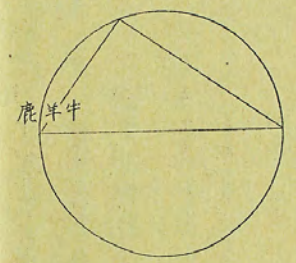
壺中隱者曰此問鎌田俊清之門人細川某之所設也蓋  
 其本出于鴻田氏鎌田氏亦私淑而共有聞焉可謂源泉  
 溷溷不啻晝夜矣宜哉其魁于諸問也舊曰以<sub>二</sub>蒲<sub>一</sub>因<sub>二</sub>盛<sub>一</sub>之  
 而不言<sub>二</sub>每<sub>一</sub>因<sub>二</sub>盛<sub>一</sub>幾<sub>二</sub>斛<sub>一</sub>幾<sub>二</sub>升<sub>一</sub>非<sub>二</sub>狂<sub>一</sub>而何意脫落耳今且不用  
 因之一用量法問術竟歸于一途不敢妄更改覽者莫恠  
 焉



算法少

術曰粟有奇通分內子得數乘四十黍有奇乘五百二十稗有奇乘二千〇八十三位相併得數以六十五除之實不滿法者為粟該銀由此得各合問

第五問



今有大円池徑二百十二里半內有如图三斜之洲只云大斜二百十里中斜百七十里小斜百里又云鹿共牛羊聚居于大小斜之共同時出去牛行盡池周而還長為一遍其曰行十三

里之六分里羊如牛一遍又行大斜而還長為一遍其曰行五里之四分里鹿亦如牛一遍又行盡三斜而還長為一遍其曰行七里之五分里如是循行不知幾遍問經幾日而再會何處  
周三百五十五  
四法徑百十三

百四十億〇六千七百七十四万四千五百  
四十三日而再會于距聚居之地三百八十五里百十三分里之七十五

臺中隱者曰是內田秀富之門人衢村重矩之所設也余竊疑是亦出乎島田氏不然何為設問如斯其至者矣乎是所謂窮管而窮理者也其術如左

術曰依術得牛四十五兆四千三百七十四万七千五百五十九億七千九百三十四万五千七百〇羊二十五兆〇八百



十七万八千三百七十七億二千四百六十九万三千七百五十〇鹿十五兆四千六百八十九万八千二百六十六億二千三百〇六萬二千五百右三數相併以三千四百八十一乘之得數滿五千三百八十六萬〇八百二十二億二千六百三十九萬〇二百五十去之餘以百十三除之得再會日數由是得所問之里數合問

壺中隱者曰夫教之行于吾邦也莫盛乎漢華於是自錄田氏內田氏中村氏川北氏者相繼崛起乎享元之際各自以術鳴于各處人人自謂抱連城之壁家家自謂握懸黎之室是以異間種種懸之神廟龍宮而觀焉許以千金玉祠皆廟緇荷座摩清水藤井明王光寺等無所不然於是遠近人士雲集霧散或誦或筆非子張則安世也余

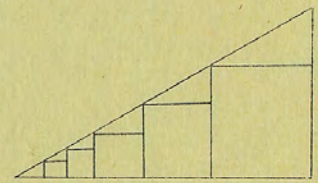
亦幸生乎其時得與諸子相共唱和凡五十四條集錄藏于家加討論潤色履萬永十五條皆類秘而不示人者也今年余歲通于耳順忽忽竟日冉冉窮年桑榆之期在于須臾因就十五條內鈔出五條以公諸嗜灸天幸加年則其餘十條亦所不隱也

設問五條

第一

今有鈎股內如圖容五方欲使各寸無不盡只六鈎股弦及五方面共合二十一尺四寸四分六釐九毛九絲六忽問鈎股弦及五方面各若干



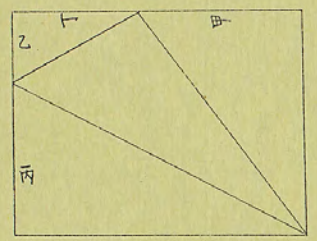


第 二

今有四方之民同末于中州各買五色之絹只云東之所買  
 每人青絹五十匹黃絹五匹赤絹十三匹西之所買每人  
 白絹八十九匹南則赤絹五匹黃絹四十匹青絹二十三  
 匹北則惠絹八十九匹又云總計一萬匹問入數各若干

西多於東北多於南東  
 西差五之與南北差等

第 三



今有直田如圖割與三斜之地  
 欲使各步無奇零只云長平甲  
 乙丙丁相和百二十步又云三  
 斜共和百〇八步問得長平及  
 三斜術

以下二問載在下之卷



算法少女中之卷甲

算法少女 卷之下

根州 壺中隱者撰術

季女平氏輯

第四

客あり互光りて其を圍む同く  
意中修考よ同く曰。嘗用光生數



と書くと。其のなまそくを極小  
うらむといへども。亦ん其極を盡  
し極もや否余等て曰是所謂極  
者少くも。巧を用るもの何の難  
き事か何らん。然る其極を得  
二審は善。今を術と問

第五

今平字二十八仄字二十八をわく  
七言律絶を能く其なまそくを極盡さ  
んし其の人あり。只云仄韻及拗體を  
不用。惡三連といへども。謹く侵  
をうらむ。又云同字を不用。翻  
くのかくも毎篇をなまそくを  
極するも。其他の詩病を是れ  
此も亦可なり。二體の篇數裁



何と問

前と併々々々々問。四方小  
示———此等と作ものな  
り

○上巻子出見自問十條自答  
如左

第一

答曰米粒十億〇七千三百七十四万  
八千二百三十三俵———  
俵三俵 六万式千八百廿七分  
俵三萬二千式百廿二  
口訣曰。一を二九を三を四を  
〇九を十を得る。再ひ自宗———得内  
定つて減———米粒の熱殺と及。俵  
法六万四千八百廿七の———是と係る



石粒と行。其法は満るものも分  
母より余りたる法は四斗より係り  
俵粒を得る合問。

重中隠者曰。定一と減する妙之  
又妙。

第二

答曰。二百半日ありて再合

術曰。十六と廿日と一斗減りて等  
粒八斗得。廿日と一斗減りて十六  
と一斗減りて十八斗得。又五斗減り  
て百四斗と得る合問。

第三

答曰。毎五斗糶米九斗日種。十八斗分

算法少女 卷下







口訣曰。先年法三尺或寸を左若し右へ  
 成る。ある際まゝ横に倒し。初め  
 連し。前と之間を斗北八尺あり。  
 自前より三尺或寸を引。除き或  
 大と修。由三尺寸を減し。一丈六尺  
 八寸を得。折半し。その原とを  
 合問

第六

答云 其術如左

口訣曰。二了。折る。えんとおひん。二九千  
 八と算し。三とおひん。三九廿七と  
 算し。四九三六。五九四五。  
 下皆如是。合問

第六



答云小圓徑四寸 方面三寸 七外寸  
三

術曰大矢小矢相同 一 二 三 四

五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

得小象徑と云。是は依之方面を以て合同

口訣曰鉤股法の短合を依之短を得

○大象徑を弦有り ○小矢倍 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

股弦差と云 ○大矢倍 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

と云 ○鉤弦差を同股法差を倍 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

て小象徑帯と云 ○大矢帯 四 小 四

徑帯 一 四 保 実 と 一 頁 ○小矢 四 四

法 と 一 心 ○一算 と 廉 と 一 頁 平

法は開 と 六 寸 と 得 る 鉤 と 云 大 矢 と 云 二

加 入 一 と 法 と 云 大 象 徑 と 云 内

小矢 二 と 減 と 云 膜 と 云 鉤 と 云 象

一 と 鉤 股 積 と 云 と 云 実 と 一 頁 ○鉤

股和 一 尺 四 寸 と 法 と 一 頁 是 と 除 と 云



方面三寸と得。実俗に満たる若  
し。分母は余一と合間

第七

善云熱教子六百八十

術曰奇のあまり半の内偶の餘を  
四半と減し。四半と得る。一を加へ半  
と成る。千六百半と成る。偶の餘は四

十を加入一と合間

口訣曰是則土壘之術ありと  
信問は所謂枚算なりと。

第八

今餘を数と設く術を施す事  
如左

一銀二千貫百千文三忽八微











只訣曰 煎穀一止もすく一。算する所のあを  
 かく六とす。二日満れんことを去る  
 餘二。故に煎穀二止も二とす。あをかく  
 二日満れんことを去る煎穀二止一。あを  
 加へ四日満れんことを去る煎穀止二。あをかく  
 あを満れんことを去る煎穀止二。あを  
 加へ六日満れんことを去る煎穀止二。あをかく  
 煎七止六。あをかく八日満れんことを去る煎

八止三。あをかく。煎九止八。あをかく十日  
 満れんことを去る煎十止三。末次第如此中  
 と煎穀三止三とす。是とす  
 と合問

第十

今假に穀を設く 術と施を事たる  
 のこと



孕婦行年二十六十月は孕む事  
有り生所の男女同

吾曰男と生

御曰年二十六の内孕月十を減一餘  
十倍一を二平定二を加へたるを○百を  
置内たるを奇と減一を餘六十實と  
一算と法と法と又一算と法と  
以心平方は開く高七と得る。其の餘

百十。折半一を七。奇数を男と  
是。若偶数を得れば女と。若同  
は合。







一 醫師平氏乃女ハ  
 子小學へ入校を志す  
 母とあつち此教へる事  
 母之冊子此中一冊の  
 かる誌を母の心算一巻  
 母も知くせ戸は〜



掃ふちりもせもふたん  
こほ席のぬいぢられ  
よせやいまこけりるもの  
院も一統講のまじり  
のこ遊びし五七子の外  
教乃及我まじりぬ

こ知らせりといふまじり  
る人乃一は記傳を  
いふらふにぬいぢられ  
と諾して背の尻乃辞  
を扱ひ申我まじり  
まじりる人ぬいぢられ



の志、心を存せしむるは  
と一陽の如きは外なる  
いふ、

安永乙未冬十二月

安永四年版本に依り謄寫す

昭和十年十月十八日印刷  
昭和十年十月廿二日発行

東京市目黒區月光町百四十五番地  
発行編輯 澤村 寛  
兼印刷人

△ 所  
印刷所 古興數學書院  
印刷部

東京市目黒區月光町百四十五番地  
發行所 古興數學書院



